

<http://www.icrp.org/>  
<http://www.icrp.org/news.asp>  
<http://www.icrp.org/docs/Fukushima%20Nuclear%20Power%20Plant%20Accident.pdf>

ICRP ref: 4847-5603-4313

March 21, 2011

**Fukushima Nuclear Power Plant Accident** [邦訳試案]

## 福島原発事故

国際放射線防護委員会（ICRP）は、それぞれの国の出来事に対しては通常コメントを行わない。しかし、我々は、このたびの悲劇的な出来事の影響を蒙った各位に、衷心より同情の念を表明したい。私たちの思いは日本のみなさんと共にある。

日本人の同僚幾人か、また、日本国内および国際的な機関と専門協会から得た情報によって、一連の最新情報が明らかになるとともに、我々は終始、最新の状況（特に福島原発に関する状況）に対応してきたつもりだし、現在も対応している。

事態を制御しようとする現在の努力がただちに結実することを願い、また、緊急状況および汚染領域での放射線防護に対して、最近の我々の勧告が、現在と将来の事態を扱う上で、これまで同様、今後も一助となることを切望している。

緊急時被ばく状況、および、現存被ばく状況における電離放射線からの被ばくに対して十分な防護を確保するために、委員会は引き続き、最適化と参考レベルの使用を勧告する。

緊急時に一般の人々を防護するためには、委員会は参考レベルを、最も高いところで回避線量が 20-100mSv の範囲になるように国内当局が設定すること、このことを引き続き勧告する（ICRP 2007, 表 8）。

放射線源が制御できたとしても、汚染地域は依然残りうる。人々がその地域を放棄することなく住み続けることができるよう、当局が必要なあらゆる防護策を講じることが一般的であろう。その場合は、委員会は 1 年間に 1-20mSv の範囲の参考レベルを選択し、長期目標として参考レベルを年間 1mSv とすることを引き続き勧告する（ICRP 2009b, 48-50 段落）。

緊急の被ばく状況に関わっている救助隊員が、被ばくによって蒙りうる重篤な放射線障害を回避するためのレベルとしては、委員会は 500-1000mSv の参考レベルを勧告し続けている。したがって、必要ならば、緊急時の計画段階でも、実際の緊急時対応の段階でも、予測される被ばくをこのレベル以下に減らすために、相当量の資源を費やすことが妥当だろう（ICRP 2007 の表 8 と、ICRP 2009a のパラグラフ e）。

さらに、もし他者に対する利益が救助隊員のリスクよりも大きい場合には、しかるべくリスクを知らされたボランティアたちによる救命活動に対して、線量制限は行わないことを引き続き勧告する（ICRP 2007、表 8）。

我々は、日本でこの厳しい状況に対応している専門家たちが払っている、たゆまぬ努力を注意深く見守っている。そして、次回予定されているソウルでの会議の折に、緊急時被ばく状況に対する我々の勧告について得られる教訓を検討するつもりだ。

ICRP 代表 Claire Cousins

ICRP 科学秘書官 Christopher Clement